

やっただぞ！畑のイレブン

就労のゴールは近い 野菜づくりから仕事に近づく14週間

京都若者サポートステーション 総括コーディネーター 松山 廉

前号で報告しました中間的就労事業「野菜づくりから就労に近づく」は12月末で終了しました。11人の参加者が、開墾から種蒔き、そして収穫から販売を経験しました。9月初めから毎週火・木・土曜日に農作業、金曜日は研修と週4日間のプログラムを3か月以上、途中リタイヤもなく無事終わりました。

農薬・化学肥料を全く使わず、一つ一つ慎重に虫取りをしたり、手づくりの有機肥料を作物の周囲にまいていまいたり…。雨の日も風の日も休まず作業を続けました。季節が変わると害虫たちもどんどん変わり、比較取りやすいハムシだけでなく、日中は土の中にいてなかなか捕殺できない夜盗虫も出てきて、対応に苦労しました。手間をかけた甲斐あって、徐々に畑の緑が増え、参加者いわく「まるでサラダバー」。まさにその表現通り、土が見えにくくなり、黄緑、深緑、赤、紫とさまざまな色の葉で覆い尽くされていきます。

販売計画の最初は小松菜や菜花、壬生菜と

いった葉物を収穫し中京ほか、北、伏見の各青少年活動センターのロビーなどで販売しました。

虫食いが目立つ葉物だったことから値段を安く設定しましたが、すぐに完売。講師のモリノメグミ代表の川久保雅悦さんから「無農薬栽培ですごく手間暇がかかっている。もっと高く売らないと！」のアドバイスで少し高値を付けました。買った人からは「野菜が生きているって感じがしたよ！」とか「虫がついても気にならない。とてもおいしいからまた売ってほしい」などと励まされました。販売したお金は参加者みんなで分け合いました。費やした時間や苦労に見合わない額でしたが、働いた喜びにつながったと思います。

事業が中盤になると、栽培や販売計画で参加者同士の意見の違いも出てきて、それをどう一致させるか悩みました。ただ農作業を体験するだけでなく、他人を意識しながら働くことの難しさも体験したと思います。

そのすべてが、参加者のこれからの人生のヒントになることでしょう。

この事業には多くの地域若者サポーターが彼らと一緒に汗をかいてくれました。一緒に農作業をするだけでなく、時に販売や宣伝を手伝ってもらったり、野菜の調理法をおそわったり、人生相談にものっていただき、温かい気持ちで寄り添ってくれました。

参加者の皆さんは非常にいいねいに、根気強く、黙々と作業をしていました。休憩時間になっても「一区切りつくまで」といって休もうとしないくらいです。暑さ続きの休み日には仲間とメール連絡しながら畑の水やりにくる姿も見受けました。そして、この事業を通じて「なりたい自分に近づいている」「自分にはできないと思っていたのに、実はできることに気付いた」ようです。協働作業の苦しさ楽しさ、仲間意識の大切さを知って就労への自信につながると思っています。

最後に農業だけでなく、いろいろな指導していただいた川久保さんには本当に感謝しています。私たちの実験的な試みにつき合っていたいただいたうえに、参加者と一緒に喜び、考え、時に苦しみを体験していただきました。そのおかげで参加者だけでなく私たちワーカーにとっても意味ある時間を過ごすことができました。

ありがとうございました。

